

# 江戸の日本刀

—新刀・新々刀の歴史的背景

## を書いて

伊藤三平

はじめに

二〇一六年の暮に、『江戸の日本刀』——新刀・新々刀の歴史的背景』を出版した。

現在の刀剣愛好家の多くは、「鑑定」に興味がある。そして自分で刀剣を購入・蒐集する時の参考になる、図版の多い「鑑賞」の本も需要がある。また昨今評判の刀剣女子は、ゲームのキャラクターに関連した「名刀物語」が大好きである。

今回、執筆した拙著はそれらとは別に、個別刀工に関する研究と、新刀・新々刀が生まれた歴史的背景を記している。毛色の変わった本であり、執筆の経緯と狙いを具体的に紹介したい。

二〇一〇年頃から資料収集を行い、適宜、それをまとめ、小笠原先生にご報告していた。

このときにまとめたものを見ると、A4 (四〇字×四〇行) = 一六〇〇字で枚数は数えるにならないが、厚さで一〇センチほど

になる。この間、小笠原先生は「名刀虎徹」、「日本刀 日本の技と美と魂」(いずれも文春新書)、「刀 KATANA」(角川ソフィア文庫)を上梓される。

先生が、ある出版社に共著の企画を提案されたが実現に至らず、二〇一五年秋に「伊藤さんがまとめた資料を、取りあえず本にすれば」との御言葉を受け、そして出版社を御紹介いただき、執筆に取りかかったという次第である。本とする分量を懸念された小笠原先生は、新々刀の鑑定、鑑賞面の視点からの共著者を提案されたが、実現に至らなかつたという経緯もある。

当初は小笠原信夫先生と共に、『江戸の刀鍛冶(仮題)』として、先生が新刀について、私が新々刀について記す予定であった。

### 1 出版の経緯

急いでまとめた初稿を読み直すと、不備な箇所が多い。改めて調査をし直し、加筆する

新々刀中心であるが、新々刀の時代も江戸時代の一部であり、その理解を深めるために、新刀期のことも「享保鑄治改め」・「享保名物帳」まで一一章にわたって記述している。ちなみに全三三章と章の数が多い。興味を持った章から紐解いてもらいたいとの狙いだが、

歌川広重 「東海道五十三次之内 三島 朝霧」

(保永堂版 著者蔵)  
今でいうガイドブック、観光ポスターの類か。



かえつて読みにくくなっているところもあると思う。今、思うと、少なくとも刀工別に掲載ページを記した索引を作れば良かつたと思う。

シーボルトやオランダ商館の医師ツュンベリーが、日本人の旅行好きを驚きをもって記述した文章も、拙著には掲載している。

このような庶民の旅行ブームに便乗、あるいは後押ししたものとして、十返舎一九は文政五年(一八二三)までの二年間、書き綴った「東海道中膝栗毛」を享和二年(一八〇二)から天保四年(一八三三)に開版し、大いにもてはやされて版を重ねた。

資料収集のはじめは、刀工別に、その刀工に関する過去の研究論文である。資料がまとまるに、刀工の特色、出自、師匠・弟子などの経歴、活動事績などの研究内容がわかる。すると研究の不備・疑問、あるいは不思議に思える刀工の活動などが浮かんでくる。その疑問を追求していく内に、本の内容がまとまってくる。

例えば、大慶直胤(図)は文政十年(一八二七)の四十九歳から七十七歳にかけて多くの旅をして、刀の中心にその地の刻印を打ち込んでいる。「何なのだ、この刀工は」との思いを抱く。

この背景を調べると、江戸時代後期は庶民のレベルまで旅を楽しんだ時代だったとわかる。宝永二年(一七〇五)の「宝永のお陰参り」では、五〇日間で三六二万人(当時の全国人口が三〇〇〇万人程度)が伊勢神宮に参拝した。

これ以降に人の動きが活発になつて、旅行は庶民にも広がつたという。宗教絡みの旅は、他にも富士講として富士山へ、大山講として相模の大山阿夫利神社への参詣などがある。

では、なぜ庶民がこのように旅行を楽しんだのかであるが、一つは庶民の生活水準が向上したことにある。江戸時代初期～中期は上方からの「下りもの」の産物に依存して、関東の人々は多くの「下らないもの」に甘んじていたのだが、物価を安定させたい幕府の意向もあり、関東での生産が奨励される。関東各地で商品作物が産出され、それが河川による流通網によつて江戸に運ばれ、江戸地廻り経済圏が形成される。

特に十八世紀になると、上州を中心に桑が栽培されて生糸の生産が盛んとなる。生糸の需要は、拙著では十分に言及できなかつたが、

江戸時代初期の対外貿易は金銀を輸出して生糸・織物を輸入していたのが、江戸時代後期～明治にかけては、日本は生糸の輸出で外貨を稼ぐよになつたことを知れば理解でき

## 2 執筆の流れの一例——大慶直胤を取り巻く歴史的背景——

大慶直胤(図)は文政十年(一八二七)の四十九歳から七十七歳にかけて多くの旅をして、刀の中心にその地の刻印を打ち込んでいる。「何なのだ、この刀工は」との思いを抱く。

この背景を調べると、江戸時代後期は庶民のレベルまで旅を楽しんだ時代だったとわかる。宝永二年(一七〇五)の「宝永のお陰参り」では、五〇日間で三六二万人(当時の全国人口が三〇〇〇万人程度)が伊勢神宮に参拝した。

これ以降に人の動きが活発になつて、旅行は庶民にも広がつたという。宗教絡みの旅は、他にも富士講として富士山へ、大山講として相模の大山阿夫利神社への参詣などがある。

では、なぜ庶民がこのように旅行を楽しんだのかであるが、一つは庶民の生活水準が向上したことにある。江戸時代初期～中期は上方からの「下りもの」の産物に依存して、関東の人々は多くの「下らないもの」に甘んじていたのだが、物価を安定させたい幕府の意向もあり、関東での生産が奨励される。関東各地で商品作物が産出され、それが河川による流通網によつて江戸に運ばれ、江戸地廻り経済圏が形成される。

特に十八世紀になると、上州を中心に桑が栽培されて生糸の生産が盛んとなる。生糸の需要は、拙著では十分に言及できなかつたが、江戸時代初期の対外貿易は金銀を輸出して生糸・織物を輸入していたのが、江戸時代後期～明治にかけては、日本は生糸の輸出で外貨を稼ぐよになつたことを知れば理解でき

大慶直胤の画像  
(高田円洲筆、庄司はる氏蔵 関東大震災焼失)  
(福永醉劍著「水心子正秀とその一門」より)



直胤の師・水心子正秀の像（岩崎重義氏蔵）  
(前著より)



よう。「お蚕さま」という言葉が使われるが、虫に尊称の「御」を付け、「様」まで付けているのである。推して知るべしである。  
木綿の栽培、その肥料の大豆産地も形成された。金儲けにつながるものは急速に普及するのだ。

当時の治安の良さも旅行に不可欠な環境だが、もう一つが伊勢講などの旅行の仕組みである(拙著では「武器講」の章で、伊勢講を詳しく述べてある)。ちなみに武器講は清磨だけではないことを、勝海舟の父小吉の『夢酔独言』から引用している。

今回、調べて驚いたのは、江戸の大城屋良助が東講という会員組織を作り、その講中に入ると通し番号付きの鑑札(会員券)がもらえ、同時に手渡される『東講商人鑑』に掲載の指定宿(協定旅館)に、鑑札を見せて泊まれば優遇されて、安全で快適な旅ができるという仕組みを作り上げていたことである。

大坂でも浪花講という同種業者が生まれている。近代の旅行業は、イギリスのトーマス・クックが、一八五一年のロンドン万博時に団体旅行企画したことから始まるといわれているが、浪花講は文化元年(一八〇四年)に結成されているのである。

余談になるが、ヨーロッパの百貨店は、パリに一八五二年にできたボン・マルシェを嚆矢とするが、日本では越後屋呉服店が延宝元年(一六七三)に現金、正札販売を実施してい

る。定価販売は、当該金額を持参した人には誰にでも売るという民主的な制度である。海外旅行に行くと、今でも相対での価格決めの国が多いことを考えれば、日本の凄さである。

さらに、大慶直胤の旅の様子がわかる資料(図)が奈良奉行として赴任している時期の日記に、直胤が来訪して親しく交流している記述を見つけた。川路は私の尊敬する人物であり、嬉しくなる。また川路と一緒に尚歯会(蜜社の獄で、この会参加者の高野長英、渡辺華山が罪に服す)にも参加している伊豆韭山の江川英龍とも、直胤は親しいという研究論文もある。

この日記(寧府記事)から、次のような直胤の性格、行動が理解できる。

①按腹(按摩)の技を自得していく、大坂の高僧豪商(鴻池家も含む)を全快させ、川路夫妻の治療も行う。また筋骨の治療も行い、大坂には隨宜庵という治療所を設け、代金を取らずに治療している。最近は弟子に庵を与えて、難治のものだけを治療している。

②相州伝の自作脇差を持参し、川路は貞宗などより上手だと感心する。

③刀剣の鍛錬法を聞くが、自らの体験に基づく話であり、川路は「なるほど」と思う。

④鉄でできた子供の足程度の「温石」を川路にプレゼントし、それを暖めて腹、背中に当てることを教える。(直胤はこの時六十九歳と長生きであり、健康に留意し、自ら健

川路聖謨の像 不鮮明だが、最も流布されている像。  
(フリー百科事典「ウィキペディア」より)

康法を実践していたことがわかる。)

⑤刀剣の利鈍、古今の刀工の巧拙などを、川路と夜中二時頃まで談じる。別の時には、直胤が実見した巧妙な偽物の話を具体的に話し、川路は息子たちに「刀は油断するな」と書く。

⑥京都で助真の刀を見て、感じたことがあって工夫したと直胤が語る。人は息を引き取るまで修行というが、まさに直胤のことと川路は思う。

⑦これから下関に旅に出て、備前刀の秘密を探りに行くと述べ、手紙に備中の鉄山にも出向いたことを知る。歳を取っても衰えない探究心がある。

⑧直胤の旅の様子は、弟子二人を連れて、立派な風俗で、駕籠に乗つたり、歩いたりである。懷には百金(両)を持ち、何不自由無く暮らしている。

刀装具の金工にもいる。河野春明は文政九年(一八二六)の四十歳の時より東北地方に出張し、四十一歳にかけて仙台に滞在し、その後北関東地方も遊歴している。また晩年の嘉永・安政年間には越後方面にも遊歴し、同地で没している。

刀鍛冶の直胤も旅の時代を生きた時代の子なのだ。

また大慶直胤は伊勢神宮、信濃善光寺にも出向いているが、白川神道の門人になつてお

り信心深い性格だった。また歡喜天の信仰も持っていたようであつたのかかもしれない。

師の水心子正秀(図)にも尽くしており、金銭の無心にも応えている。後継者も次郎太郎

このように、旅に出たのは大慶直胤だけに特有の性格かと思うと、次のように諸芸の士も旅に出向いて、作品の肥にしていることを知る。

絵画では池大雅が二十六歳の時から各地を遊歴し、浦上玉堂は寛政六年(一七九四)

の五十歳の時に鴨方藩を脱藩して遊歴し、田能村竹田も豊後岡藩の藩士を文化十年(一八一三)に辞してから旅に出る。また谷文晁も田安家の家臣であつたが、旅を好み、訪れていない国は四、五カ国に過ぎないとされている。

彫刻でも木喰上人は安永二年(一七七三)の五十六歳の時から全国を行脚して六十一歳から彫刻を作つたとされている。

新々刀の重要な美術品は清麿が四振だが、直胤も三振が指定されている。ちなみに左行秀が二振、水心子正秀が一振と続く。

江川英龍には大坂から大塩平八郎の乱の様子を知らせたり、砲術家高島秋帆の紹介の労を取つたりしている。また江川が行おうとしている洋式大砲铸造事業にも理解を示している。要路の高官と、親しく交われる教養・見識もあつた大人物だったことを再認識しておきたい。

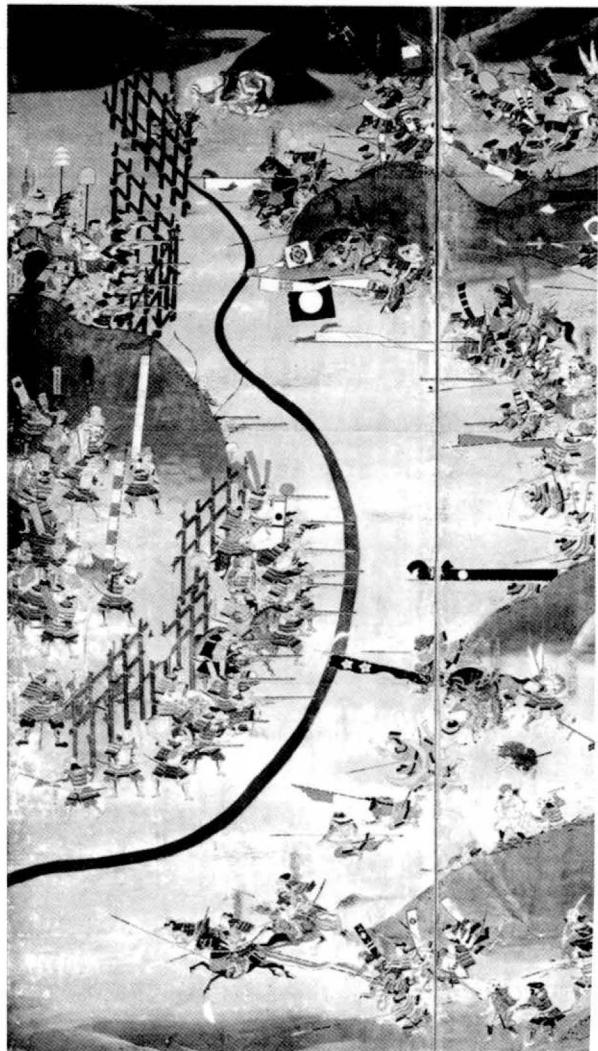
### 3 江戸時代における刀の位置づけ

江戸時代の中後期の歴史を、日本刀に関することという軸で調べ、記述したというと、刀=武器の発想では、「江戸時代の戦いとは?」になる。江戸時代は元和偃武(大坂夏の陣が終了した元和元年以降に武器を偃せて武器庫に収めた)以降は、局所的に島原の乱があつた程度で、幕末の動乱期まで約二五〇年間は世界史でも稀な平和の時代である。

そこで、第1章で江戸時代の刀の役割を、  
①武器、それも集団戦ではなく個人戦の武器、  
②身分制の象徴、③日本人として日本刀愛好、  
④武家の贈答需要と整理した。

「長篠合戦図屏風」(一部 東京・成瀬家蔵)  
〔『日本歴史展望 第6巻』より〕

長槍で突撃してくる武田騎馬隊を、織田鉄砲隊が迎え撃つ。  
この戦い以後、戦いの様相が一変したとされる。



刀で戦うのが普通だが、集団戦での主力武器に日本刀はありえない。何のために甲冑を着ているのかを考えればわかるし、実戦の心理は「離れて戦いたい」のが基本なのである。

戦国時代の軍忠状(参陣、軍功を主君に認めてもらう書状)のデータを拙著では引用したが、矢傷、槍傷、礫傷が主で刀劍傷は数%に過ぎない(鉄砲が使われるようになると鉄砲傷が過半)。刀剣は矢弾が尽きて進退が窮まるまでの切り込みで使うか、優勢で敵を追いで首を取る時に使う程度だろう。(図)

刀は集団戦ではなく、個人戦の武器である。では、江戸時代において個人戦、すなわち上意討ち、仇討ち、無礼打ちが多かつたかとい

うと、江戸時代中後期からは非常に少ない(現代でも殺人事件はあり、その程度は存在しただろう)。

武士には特有の倫理があり、臆病、柔弱、逃げたに類する悪口には敏感であり、立ち向かうことが求められたが、勝っても喧嘩両敗が基本であり、その場で切腹が武士らしいとなる。逐電すれば仇討ちで追われる。江戸時代前期を過ぎると仕官の道は無い。受け継いで来た家は当然に絶家とされ、先祖に申し訛の立たないことになる。町人の無礼を咎めることは必要だが、無礼打ちした場合は証人が必要であり、無礼を立証できない場合は切腹というように、難しい立場に立たされることになる。

そして刀が実戦に使われたのは、天誅といふ名でテロリスト(暴力や脅威で自分達の政治的主張を実現しようとする動き)を行う者が増えた時である。尊皇は一種の宗教になり、テロリストの主張を正当化する。暗殺・闇討ちに鉄砲、槍を武器にすることはできない。また鉄砲の持ち歩きなどは厳禁である。その点、刀は普通の武士が指しているものであり、これほど暗殺に便利なものはないわけだ。

新撰組はテロリストという無法者集団に対する、いわばカウンターパート(本義は「対等の立場にある相手」だが、ここでは対抗集団の意)で生まれたのである。活躍したのは文久二年(一八六二)から元治二年(一八六五)のたつた四年間である。第二次長州征伐(一八六五)や鳥羽伏見の戦い(一八六八)のような集団戦にも参加した土方歳三が、「武器は銃でなければだめだ。自分は剣と槍をもったが一度も使う機会は無かつた」と正直に述べている。

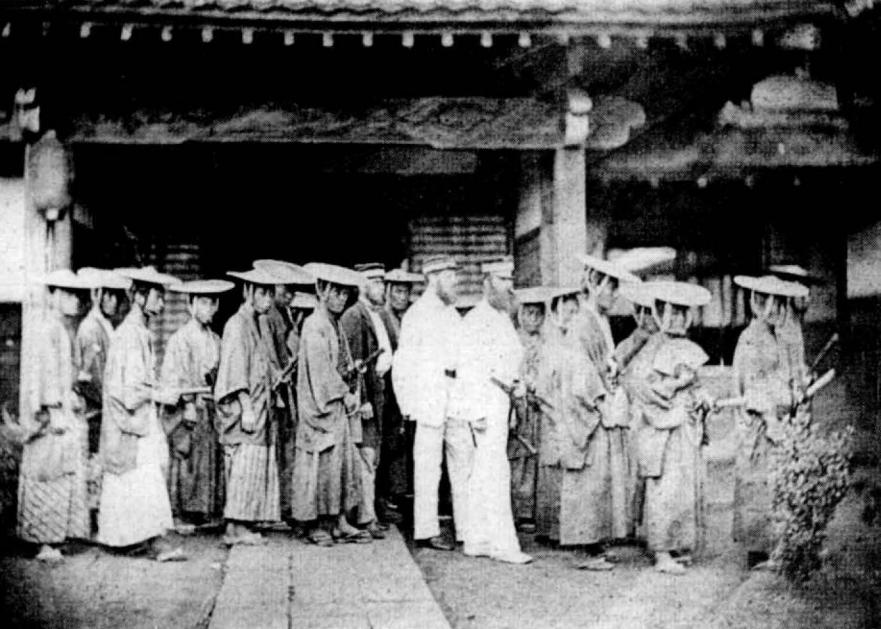
同時に、攘夷そのものの異人斬りというテロリズムも吹き荒れた。安政六年(一八五九)のロシア軍人殺害から慶応四年(一八六八)まで、慶應元年を除いて毎年起きている。このテロリストに対するカウンター

江戸時代の中期過ぎになると、武士の慣用法と公法の間での矛盾においては、公法優先となっていく。町人の無礼には「見て見ぬふりをする」で見過ごすのである。

警護の役人たち（レンズが撮られたF・ペアードの幕末）小沢健志・高橋則英監修より

中央の外国人左は一等書記官メットマン。右はオランダ総領事ポルスブルック。

その背後に、オランダの衛士が一人。前後を警護の武士（役人）が囲む。



パートとして外国御用出役が設置され、最終的には一五〇人になつたという。

この人数は膨大であり、拙著出版後に心配になつたが、英國公使オールコックに関する本を読むと、文久元年（一八六一）に英國公使館襲撃事件があつた時に、公使館に詰めていた護衛（大和郡山藩、三河西尾藩士もいる）が

一五〇人とも二〇〇人とも書いてある。他国

の公使館でも警備が必要であり、多くいたことは間違ひがない。剣技に優れた旗本・御家人の次男、三男には良い就職先になつたわけである。（図）

この時代には、各藩の内部でも公武合体派と尊皇攘夷派の争いがあり、一方が他方を暗殺する事件は起きている。

すなわち日本刀が武器として実際に多く使われたのは、万延元年（一八六〇）の桜田門外の変から元治元年（一八六四）の禁門の変、第一次長州征伐という集団戦が生じるまでの五年間である。

外国人の記述を拙著では紹介した。三種の神器の一つも刀であり、倭寇の姿を描いた中国の絵画にも日本刀と扇子を持って描かれるし、民族に受け継がれてきたものだ。

④武家の贈答需要は、武士の表道具が刀であり、折紙という仕組みが生まれたことでも理解できよう。

#### 4 新たな歴史研究の成果

—剣術は百姓・町人も学んで強き者もいた—

私は歴史書（現代の歴史学者の研究書）を読むのが好きであるが、時々ハッとする記述に出あう。他人から見れば、私の勉強不足に過ぎないのだが。

例えば小学館の日本の歴史シリーズの一冊「江戸時代 十九世紀 開国への道」（平川新著）の「第六章 庶民剣士の時代」は目から鱗であった。万延元年（一八六〇）に発刊された『武術英名録』（関八州の剣士の名前、流派、居住地が記されている名鑑で、いわば剣術修業のガイドブック）に所載されている剣士六三二人の九四%が百姓身分だと、研究成果が紹介されている。名字も名乗っているから武士と思つたが、当時は公的な書類以外では、百姓でも名字を名乗ることは黙認されていたわけだ。

考えてみれば、スポーツ選手に家柄の出身など関係無いから当然のことなのだ。新撰組に百姓身分が多いとかは、当時としては特記であつたと、驚きをもつて記されているなど、

江戸時代における刀の役割の②身分制の象徴とは、刀・脇差の二本を指せたのが武士階級ということである。なお当初は町人の正装には脇差一本が必要であったが、徐々に制約されている。

③日本人として日本刀愛好に関しては、ザビエルの書簡にも、日本人は日本刀を好み、成人の男子は刀を二本指すことが成人の象徴であつたと、驚きをもつて記されているなど、

もちろん町人でも剣を学ぶ者は多く、幕府は江戸町人には天保十四年に武術稽古禁止を示達している。農村にも文化二年（一八〇五）に百姓の武芸習得を禁じている。この法令として出ていることや、実際の奉行所等の取締側の人数からも、それほど厳しい取締は無かつたと考えられている。例えば文化二年に関八州取締出役が新設されるが、当初は總員八名で、二人一組で水戸藩以外の関東八州を巡回する。実効は上がらず、以降順次増員され、それがそれでも合計二一名という実態であり、ヤクザが跳梁したわけである。

では、なぜ百姓身分で剣術が盛んになつたのかが疑問となる。庶民の旅行熱の章で前述したように、農村の生活水準の向上の側面もあるが、天明の大飢饉、天保の大飢饉などによる治安の悪化も要因の一つである。それに加えて剣術の歴史も関係している。

江戸前期に盛んになつた剣術だが、徳川綱吉が天和二年（一六八二）に他流試合を禁止した。そこから流祖の神格化が始まり、秘密主義によつて、文字通り「型どおり」のものとなつて停滞した。その後、竹刀と面と籠手での稽古方法の案出、胴の発明を経て、天保七年（一八三六）に老中水野忠邦が他流試合の解禁の触れを出したことから隆盛になり、多くの道場ができて百姓、町人も励んだというわけである。

ここで、資料収集のこぼれ話を記しておきたい。剣術の歴史関係の書籍の中に、「天保の改革で他流試合解禁になつた」の記述を見つけたのだが、裏をとれる資料が見つからない。天保の改革は天保十二年（一八四二）～天保十四年（一八四三）であり、他流試合解禁の触れは天保七年だったというわけである。

天保の改革の最中の天保十三年に、清麿の恩人窪田清音は納戸頭を免じられて差扣の罪を得てゐるが、この理由がわかる資料を探し続けた。『水野忠邦』（北島正元著）、『納戸頭も含まれる当時の幕府役人の罷免理由が掲載されていて喜んだ。

明暦の大火と寛文新刀の関係は以前に論文を書いたが、今回、洞富雄氏の鉄砲関係の書に、堺鐵砲鍛冶の年度別製産高の図が掲載されており、明暦三年（大火の年）に異常に多いのを見つけ、嬉しくなる。念のために、記されていた原資料の『堺市史』にあたると、幕府御用筒と諸国説え筒の数値が逆になつて誤っているのを発見した。幕府は國友鍛冶を中心で、堺鍛冶は利用していなかつたが、大火で焼失した御用意筒の補充には堺鍛冶も利用したというわけである。

資料収集は国会図書館にお世話になつた。苦労するが、求めていた資料に出会うと喜びも大きい。後世の人のこのような辛苦を減じるために、また拙著にも誤りがある可能性もあり、参考文献のリストは具体的かつ丁寧にまとめている。

（続く）

同封の振替用紙ご利用の上、刀剣柴田にご注文ください

**新刀、新々刀の歴史的背景**

**江戸の日本刀** 伊藤三平著

■A5判／ハードカバー／三七四頁  
税込定価 三、八八八円（送料三五〇円）

東京国立博物館名譽館員・小笠原信夫氏推薦

江戸時代における刀剣の位置づけ／江戸時代の武士にとっての刀剣使用／刀鍛冶は城下町に／剣術諸流派の勃興と停滞／辻斬り横行の時代／江戸時代の人口推移／江戸への刀鍛冶の流入／寛文新刀の出現／幕府藩の財政状態と武士の困窮／元禄から享保の刀剣界の衰退／享保以降の治安の悪化／水心子正秀と新々刀／花開く正秀の弟子たち／水心子正秀は江戸の産業ルネサンスを担つた一人／江戸の啓蒙主義／サロン文化／刀剣ジャーナリズムの拡大／正秀弟子の巨星・大慶直胤／天保の改革と剣術の流行／庶民への剣術の広がり／「身上がり願望」／切れ味重視の動き／荒試し／源清麿における切れ味追求／いつの時代にも大切な芸術の支援者／武器講／江戸時代の貨幣／収入単位と物価水準／新々刀の価格／刀が実戦に使われた時代／幕末の動乱、戊辰戦争と刀鍛冶／廃刀需要／後の刀鍛冶の転身／帝室技芸員制度と日清戦争後の軍刀需要

# 江戸の日本刀

新刀・新々刀の歴史的背景

## を書いて（続）

伊藤三平

### 5 武人が政治を司つた国だからこそ生まれた日本刀

この章は、拙著では簡単に触れた程度だが、少し詳しく述べてみたい。

同じアジアでも中国大陸、朝鮮半島の国と日本は違う。中国では「文」が「武」の常に上位である。武官はなんなる戦争の技術者で、戦略は文官が担当した。政治を担う文官を選ぶ制度が科挙であり、モンゴル人の征服王朝時期を除いて、一三〇〇年ほど継続していた。科挙の試験は非常な難関だが、儒学や文学（詩も含む）の知識だけである。専門知識を持つ実務は格下の業務として、地方採用の役人が担当した。学力（記憶力）という実力主義だが、膨大な書籍を学ぶわけであり、結局は特権階級のものであった。

日本の科挙の試験を受けて官僚となり、武人は中枢府の高級官僚にはなれなかった。他に専門知識者（例、通訳、医学など）を選抜する雑科があった。そして儒教を国教としたために、両班の人は労働行為そのものを忌み嫌うようになり、「転んでも自力では起きない」「箸と本より重いものは持たない」といわれるような弊害を生む。

科挙重視だと、書籍に書かれたこと＝尚古思想となる。これに中華思想が加わり、外国の新しいものは毛嫌いする。これで進歩が妨げられたともいわれる。

視し、それが御成敗式目として、長く武家法の基本になっている。

現実重視とは、強い者、優れた物を重視し、正義の観念を弾力的に運用する。関ヶ原の戦いで、豊臣恩顧の大名が「秀頼公のために」と徳川方に付いたり、幕末に挙つて攘夷騒動で大騒ぎをしたのに、明治の時代になると、「先立つものは軍備→富國強兵」として文明開化、そして鹿鳴館時代になったのも、太平洋戦争時に「鬼畜米英」だったのが、豊かで自由な米国の実情を知ると「ギブ・ミー・チヨコレート」になつたのも、日本の一側面なのである。

日本は鎌倉時代から、武人が政治を司つた国である。この違いは重要である。

「文」はあるべき姿＝理念重視に、「武」は現実重視になりがちである。鎌倉幕府（源頼朝団）は、各武士の所領間トラブルの解決のために、武士が支持した政権である。そのため、現実を処理するための機能や慣習を重視したが、武（大砲、班（文班と武班）という貴族階級が文科と武科

徳川吉宗は、家康の時代は財政も健全であったから、あの時代の尚武の気風を復活させて、生活は質素・儉約にすべき、だから古いもの、伝統のあるものを大事にするという政策を実行した。その一環として新規製造物禁止令と呼ぶべき法令も出したが、武（大砲、

馬術)についてはオランダから最新の技術・情報を取り入れている。また後の蘭学の興隆に貢献する洋書の解禁もしている。強い者、優れた物(美学)の重視だからである。

現実重視の一つに、「実戦リアリティ」という言葉がある。拙著にも書いたが、武道だけでなくスポーツ、囲碁・将棋でも対人競技で立ち会うと、彼我の実力差を感じるものなのである(感じないのはあまりに弱いからである)。この感覚は大事である。これがあるから勝つために練習するし、戦い方を工夫するし、道具・武器の機能の向上に意を払うのである。神国思想を奉じて「実戦リアリティ」を忘れた悲劇を、繰り返してはならない。

専門家(下級武士層)が自分の持ち場ごとに提案して、上が決済していく仕組みになる。その結果、責任の所在が不明確な無責任体制

武人が上に立った結果、政策は現場を知る  
ことはない。また武器の性能向上は大きな  
関心事であり、それが「折れず、曲がらず、  
よく切れる」という日本刀を生み出し、また  
戦国時代末期には世界一の銃砲活用国になっ  
たわけである。

今でも匠の技に敬意を払うのが日本人の特  
色である。拙著に書いたが、身分の高い人が  
自分で刀鍛冶の弟子になって鍛刀したり、絵  
を画くことに抵抗が無いのが日本である。

これが、近代工業化に大きな力になつたと  
考へる。

## 6 「武」の価値観がもたらした 人間行動と日本文化

また剣の根本にある儒教は、「孝」が一番大切だが、日本では「孝」は「私」の世界で、「公」の世界では、武士の「御恩」と「奉公」の関係に基づく「忠」を優先した。なお「忠」優先というと、主君への裏切り

伝源頼朝像(国宝 神護寺蔵 ウィキペディアより)

武家政治を開いた頼朝。近年、足利直義像で  
はないかとの説もでている。

(実質は下が動かす)、セクショナリズム、先  
例主義が生まれる。

太平洋戦争時には、科挙ではないが学業成  
績優秀な軍官僚が中心になったために、石油

の備蓄が戦争すれば一年半程度という現実が  
ある中で、机上の都合の良いストーリーを、  
佐官クラスが部署ごと立案して開戦に突き進  
み、先住者の誤謬を指摘しない官僚主義の弊  
害で、後戻りができずに意味の無い戦いを続  
けたのではないか。

「武」は肉体労働でもあり、労働を蔑視す  
ることはない。また武器の性能向上は大きな  
関心事であり、それが「折れず、曲がらず、  
よく切れる」という日本刀を生み出し、また  
戦国時代末期には世界一の銃砲活用国になっ  
たわけである。

今でも匠の技に敬意を払うのが日本人の特  
色である。拙著に書いたが、身分の高い人が  
自分で刀鍛冶の弟子になって鍛刀したり、絵  
を画くことに抵抗が無いのが日本である。

これが、近代工業化に大きな力になつたと  
考へる。

「忠」は「忠義」とも使われるが、「義理」とは人が他人に対し立場上振る舞うべき義務である。だから建前としての行動原理である。「武」重視→現実重視→強い者、優れた物を重視→正義の觀念を彈力的に運用するという思考の流れになるから、「義理」は絶対的尺度ではなく相手や場面によって異なる個別主義にもとづく行動原理・価値基準という面がある。

は悪になる。拙著では百石という知行取の武士と百俵という藏米取の武士(実収入はほぼ同じ)の違いを書いた。

知行取の武士は知行地の支配者として、そ  
の土地の人民を支配し、警察権等も持つてい  
た国人領主の系列である。だから主君とは知  
行高は違うものの同様な出自であり、主君と  
の関係は同盟であり、主君はその盟主となる。

一方、藏米取の武士は主君の家の藏から米  
をもらう形態となり、使用人であり、現在の  
サラリーマンである。このようなり立ちを  
考へると、知行取の武士がその同盟から離脱  
するのは裏切りではない。信濃の国人領主真  
田家が、時に応じて同盟相手を変更したのは  
当然なのである。ただし、形勢が悪くなつて  
から離脱すれば、卑怯者となつて武士の慣用  
法から処断される。

「武士の嘘を武略といい、仮の嘘を方便とい  
う」という言葉も残っている。正義の觀念  
を彈力的に運用し、嘘に罪悪感が無いのが日  
本人の欠点ともいえる。

「忠」は「忠義」とも使われるが、「義理」とは人が他人に対し立場上振る舞うべき義務である。だから建前としての行動原理である。「武」重視→現実重視→強い者、優れた物を重視→正義の觀念を彈力的に運用するという思考の流れになるから、「義理」は絶対的尺度ではなく相手や場面によって異なる個別主義にもとづく行動原理・価値基準という面がある。



近松門左衛門の人形淨瑠璃『曾根崎心中』の主人公、お初・徳兵衛の露天神(お初天神)境内にあるブロンズ像(ウィキペディアより)

主人(実の叔父)への義理、継母への孝、金の貸借で壊れる友情、遊女との愛という人情の葛藤が描かれる世話物の名作。それらのしがらみを一挙に断つべく、二人は曾根崎の天神の森で心中する。



平重盛像 (三の丸尚蔵館藏『天子摶関御影』所収 ウィキペディアより)

伝平重盛像 (左 国宝 神護寺藏 前同より)

前掲類朝像とセットで、これは足利尊氏像ではないかとも。

頬山陽著『日本外史』に、重盛は、後白河院と清盛の間に挟まれて、「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」と嘆いたと記述されている。

平家一門の中では、重盛は院に近い立場にあったとされる。

これに対して、私的な場面における家族、恋人、友人などと親愛の情で結ばれた関係を示すのが「人情」で、本音に通じる行動側面という面がある。また「人情」は私的な場面での倫理をささえるものである。

武士は武士から「頼む」といわれ、承諾した人物を守らねばならない。その人物が何で自分を頼るようになったかの経緯は、承諾した後に詐索しても仕方無い。江戸時代の中期以降は、公法(頼んだ武士が法を犯していれば罪人を匿うことになる)との矛盾を、「聞こえなかつた」とか「別のことかと思つた」として対処する廻世術が生まれてきたのは、前述(前回の3章参照)した通りである。

外国企業との契約において、「彼とはこちらの事業でも世話をなっている」「一所懸命に我々のために骨を折ってくれている」という「義理」と「人情」基準によつて、多額の損失を出してきたのが日本人である。

これらの「武士の慣用法」と「公法」、「忠」と「孝」、「義理」と「人情」の間の葛藤を、男女の「愛」に絡めているのが日本の文学、演劇である。西洋の演劇・オペラの「愛」優先とは比べものにならない豊かさがあると思つてゐるが、この話は稿を改めたい。

また武士が政治を担つたから、卑怯なこと、ずることになり、腐敗行動が比較的少ないの

が日本である(試験で成り上ると、一代で富を得ようとするが、日本は世襲身分で守られていたためという側面もある)。そして、「孝」より「忠」という「公」優先によって、組織的活動が得意とか、アジアの中でも民主主義が根付いている国という評価につながるものである。

武士の慣用法が後に武士道と呼ばれるが、基本は男らしさを追求するものである。男の大人としての自覚が基本である。だから盜みなどをすれば、町人階級は盗んだ金で罪が異なるが、武士は自ら切腹するのが当然であるが、罪に服したら全て死刑である。

要は、危険な刃物を携帯しても大人の自覚がある人物(武士)だから問題無い、ということである。米国の銃器携帯容認も本来はこういうことだと思うが、大人の自覚がある者に限らなければならない中では時代錯誤であろう。

昨今の企業不祥事において、末端は罰せられても、一番上のトップは関与した証拠が明確でないとして罪を免れる。昔の武士の慣用法(従者の不始末は主人の不始末、その従者を成敗し、さらに大きな不始末なら主人が死んでお詫びをする)を覚えている我々は、このような事件があるたびに違和感を感じるのである。

## 7 江戸時代後期における 身分制の崩壊

江戸時代は厳しい身分制度があつた社会で、武士と町人(商人、農民、職人)の間だけでな

## 仙台藩の献金額と特権

献金額	特権
300両	組士より大番組になしおく
300両	組抜けより組士になしおく
180両	百姓より組抜並に仰せつけ
150両	百姓苗字帯刀ならびに妻子まで絹布御免
100両	苗字帯刀御免の者ならびに御扶持人等より組抜並に仰せ渡し
100両	御知行一貫文下さる
100両	御扶持方三人分下さる
75両	百姓苗字帯刀麻袴御免
25両	百姓苗字御免
25両	百姓麻袴御免
10両	百姓屋号御免

拙著227頁所載。原典は『日本の歴史 江戸時代 十九世紀 開国への道』(平川新著)より。ほかに盛岡、土佐、熊本藩にもあったことを拙著で記す。



千葉周作像 (ウィキペディアより)

神田お玉が池、また弟定吉の桶町道場には、幕末に活躍する著名人が数多入門している。周作の盛名あまねく、諸侯から招聘されたが辞して受けず、ただ水戸烈公の懇意もだしづく、後に正式に水戸藩士となった。

く、武士の中でも上士、下士、足軽などの階層が分かれ、さらに細かく分類されていた。

商人の中の身分制度は、現在の会社の中の役職の違いとして理解できるが、吉原の女郎でも太夫、格子、呼出、散茶、座敷持などと分かれていた。ちなみに吉原の太夫の遊びは、今の金額にすると一晩五〇万円近くになる。

今の女優・アイドルだから、おいそれとは遊べないのである。

江戸時代後期は、身分制度が大きく揺らいだ。その一つが、前述したように剣術が庶民にまで流行したことである。天保七年(一八三六)の他流試合解禁により、流派の伝統よりも実力が重視されると、人材が集まる江戸の大道場での修業が大事となる。

桃井春蔵の鏡心明智流・士学館は南八丁堀鰐河岸に、千葉周作(図)の北辰一刀流・玄武館は神田お玉が池に、斎藤弥九郎の神道無念流・練兵館は九段下にあった。以上の三大道場とは別に、伊庭秀業の心形刀流・練武館が下谷御徒町にあり、幕府の講武所も神田三崎町に移り、講武所ファンションを生み出している。

今の東京における大学と同じようなものだ。剣だけでなく、思想面での影響を受けたに違いない。

スポーツの技量と身分は関係なく、剣術の試合においては、腕がたてば下級武士・郷士でも一目置かれるのである。これら身分の

者には楽しかったと推測できる。

蘭学も流行する。蘭学の実力に応じて参加する会読グループのレベルが上がっていく、緒方洪庵の適塾(天保九年)のシステムは有名だが、蘭学を学ぶ者の間で「蘭学者相撲見立番付」が作られ、そこでは身分に関係無く、蘭学の実力に応じて蘭学者氏名が掲載されている。

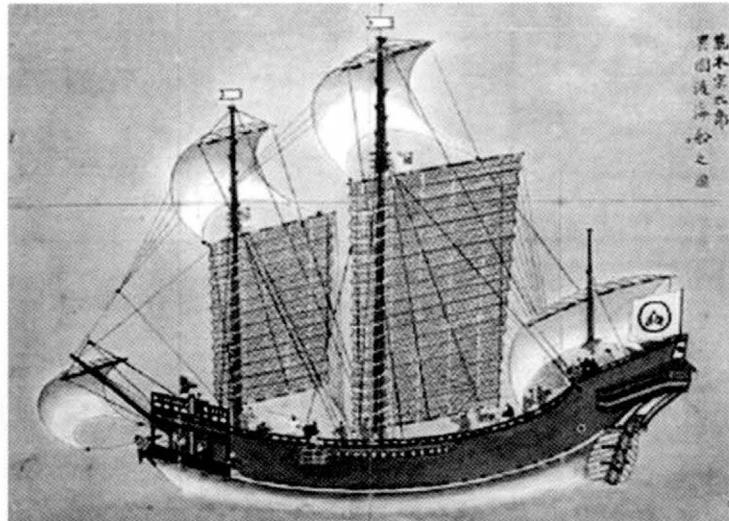
江戸時代後期には藩政改革に先んじた肥後熊本藩、出羽米沢藩の藩校設立を真似て、各藩でも天明頃(一七八一)から藩校が急増する。そして庶民の寺子屋も寛政頃(一七八九)から急増して、十九世紀には「教育爆発」とも称されている。

蘭学にしても儒学においても、勉強のできる子と身分は必ずしも関係がないのは自明のことである。

そして財政が厳しい藩の方では、身分を金で売る売祿制度を取り入れている。定められた金額を献金すれば、その額に応じて身分(名字帯刀など)が得られる制度である(図)。

こうして武士になつた者を、門閥制度の士は「金上侍」とか「金上げ侍」と呼んで陰では軽蔑したが、そういう武士も厳しい家計を営んでおり、金上侍に頭を下げることもあつたわけである。

このように剣術の腕、学問という頭脳、金の力で身分の向上を図る者も多く出たのが江戸時代後期である。拙著では、こうした中で刀工としての受領銘を得たり(これは金力)、刀工としての実績によってお抱え鍛冶軽輩



朱印船（荒木船）（ウィキペディアより）

倭寇を取締り、海外交易を統制する必要から、政権は朱印状を発行した。荒木船は、長崎の豪商荒木宗太郎の所有船で、資金提供するだけの他の船主と異なり、宗太郎は兼船長としても自ら乗船・渡海した。サイズは500～700t、乗組員200人前後。

命、クーデターなどの位置づけが歴史学者によつて議論されているが、西洋列強の力を見せつけられた人々が、江戸時代の身分制度の富国列強を目指したことではなかろうか。下層武士、郷士（名主）が活躍しているのが、その例証である。

## 8 欧州の歴史との近似性

日本の安土桃山～江戸時代が近世日本史だが、同時代の世界史では十四～十五世紀にルネサンス（イタリア）、十五世紀からの大航海時代（スペイン、ポルトガル）、十六世紀の宗教改革（ドイツ、フランス、イギリス）、十七世紀の三十年戦争（ドイツ）、清教徒革命・名誉革命（イギリス）、ルイ十四世の絶対王政（フランス）、十八世紀の啓蒙思想（フランス）、十八世紀末のアメリカ独立戦争（イギリス、アメリカ）、フランス大革命（フランス）、産業革命（イギリス）、十九世紀はじめのナポレオン戦争（歐州各国）、その後の各国の民族国家成立と植民地経営（歐州各国）などを習う。

だが土分、卒分）になつて身上がりを果たしていく刀鍛冶のことを記した。

江戸の剣術道場や有名な蘭学塾などで、新しい思想の影響を受け、交流によつて人脈が広がり、思想や問題意識は各藩に伝わつていったのである。

また教育レベルが上がり、出版が興隆する中で、新しい知識、思想文化を受け入れた人名も多かつたと考える。

明治維新について市民革命、ブルジョワ革命、クーデターなどの位置づけが歴史学者によつて議論されているが、西洋列強の力を見せつけられた人々が、江戸時代の身分制度の富国列強を目指したことではなかろうか。下層武士、郷士（名主）が活躍しているのが、その例証である。

日本ではローマ教皇のような絶対的な宗教権威がなく、法華宗と一向宗、比叡山などが争っていた。そして織田信長の一向宗弾圧、比叡山焼き討ち、豊臣秀吉の根来征伐、それに徳川政権のキリストン弾圧によって、西洋諸国よりも早く、宗教の世俗権威への介入が排されていたと考えられる。弾圧すると同時に宗教施設が支配していた領地も收回していったわけである。

西洋の絶対王政とは、「宗教改革によつて教会の力を奪い、その強大な力で地方の封建諸侯の力を削いで、中央集権の政権を確立した」ことである。日本では、織田、豊臣政権を経て徳川幕府が確立した政権と同じことである。

大航海時代は、日本では倭寇、朝鮮出兵、朱印船貿易（國）まで続く時代である。鎖国といわれる制度で、自ら大航海時代を終わらせたのが日本である。この結果、平和が続き、戦時消耗が無い分、農地は豊かになり、治山治水などの国土保全、都市整備という社会資本の整備に力を注げたのである。

この分、歐州各国のような植民地経営に出遅れた。それで良かったのだが、それを取り戻すべく動きだしたのが戦前の日本である。

後藤家の彫物(家彫)(『刀装金工 後藤家十七代』島田貞良・福士繁雄・閔戸健吾著より)

ほかに一匹、三匹獅子などがある。各代で小異はあるが、伝統的図柄を踏襲している。

これらも江戸時代の日本で生まれていたとの歴史学者の説を、拙著で紹介している。

ルネサンスⅡ人間復興は、「中世に君臨してすべての支配的地位にあった神学に対して、

自由で人間らしい古代の復興Ⅱ人間の学への転換」ととらえられる。

日本では、儒学Ⅱ官学Ⅱ朱子学の支配への批判から始まる。江戸幕府の初期は、林羅山

を登用して朱子学(明の朱子が解釈した儒学)をもって正学としたが、山鹿素行(一六二二)

(一六八五)を先達とする復古儒学が生まれる。荻生徂徠(一六六六)一七二八)も、「朱

子学は憶測にもとづく虚妄の説にすぎない」と喝破して古文辞学を確立する。そして国学

の運動が生まれる。

書では御家流(青蓮院門跡の尊円法親王の書法)を幕府の御用書法と定めた。そして御家流の書法に反抗したのが書道復古派(唐様)などである。医学は後世方(唐・宋以降の書物を参考にした医術)の医家を侍医にした。そして御用



横谷宗珉の彫物(町彫)  
〔刀装小道具講座3  
江戸金工編(上)〕若山泡末著より

縦団にし、堂々とした獅子を正面から大きく彫る。横谷獅子と世に賞賛される。

医学の後世方に対しても古方家(唐以前の古典)と実証主義を重んじる)が輩出していく。

いずれも、「より古い時代のものを发掘して革新」している。

絵画では狩野派の絵を本画と定めて御用絵師に任じるが、より人間的な姿態や、より自然な風景を描いた浮世絵が生まれる。

刀装具の彫りにおいても後藤家による家彫(まち彫)が生まれている(図)。

「より人間的」な動きであり、「決まりごとの束縛から離れて自由に」という運動である。

寛政の改革を主導した松平定信は復古主義を唱えたが、これは「昔のものや、祖法にも良いものがあり、それを大切にし、過去をきちんと踏まえながら、現在・未来を考える」というものである。

この動きを受け、水心子正秀が復古刀(鎧刀の古法を甦らせて、折れず、曲がらず、よく切れる日本刀を造る)を提唱して、新々刀の時代を切り開いたのである。

日本でも庶民の旅の時代に入る前に、本草

ヨーロッパの啓蒙思想は十七世紀末に興り、十八世紀後半に全盛期を迎える。「キリスト教の絶対的権威も含めた旧弊打破をとなえ、科学的合理主義、とくに自分の眼で見る経験主義を大事にする」動きである。

自分の眼で見ると、旅で新しい世界を見ることや、人の交流が大切となり、フランスではサロン、イギリスではコーヒーハウス(カフェ)のような場所で、今、実際に何が問題なのかについて常に討論するような機運が出る。サロンには共通の興味、趣味の集まりもあり、そういう中から持ち寄った情報を整理する動きが生まれ、それが当該分野の出版にもつながる。

その一人の高山彦九郎は東北の飢餓の様子を具体的に記した日記も残しており、約三十の日記を分析すると五千人ほどの人物と交流している。この一人として親しく交流したのが水心子正秀であり、具体的な交流の内容は本で紹介している。

産業革命としては、石炭による蒸気機関のような動力革命は生まれなかつたが、平賀源内、田中久重(からくり儀右衛門)などや、その他の名が知られていない多くの発明家を輩出した。水心子正秀の秘伝を惜しみなく公開する姿勢を、識者は高く評価している。

西洋のサロン文化に対応するが、日本では学問や趣味の集まりである。大坂には漢詩の詩社があり、木村蒹葭堂、片山北海などの文人が主催する。江戸では俳諧サロンや狂歌のサロンが○○連として多く結成される。蘭学では大概玄沢の芝蘭堂で「おらんだ正月」が祝われる。書画のサロンの書画会も各地で行われる。

こうして、共通の興味、趣味の集まりを通じてお互いに知識を高めあう中で、多くの学芸情報が蓄積され、それら情報の整理でジャーナリズム(現時点の情報を整理し、印刷物にすること)が発生する。刀剣書が江戸時代後期に多く出版されたのも同様の動きであろう。「武家目利き四天王」の言葉が残っているが、この四人には、それぞれに学ぶ者が多くいたと考えられる。

出版物隆盛の背景には、前述した藩校、寺子屋教育の充実がある。「読み、書き、そろばん(計算)」の教育によって、江戸時代の識字率(地域によって差があり、近畿、瀬戸内、東海は高く、東北、南九州は低い)は当時のヨーロッパの水準(こちらもプロテスタンントで聖書を読む必要のある北方が高く、南欧、ロシアは低い)を上回っていたと推測されている。当時のオランダ商館長やプロシヤの使節が残した書物にも、日本の教育水準の高さが驚きをもって記述されている。

この小論では、拙著で踏み込めなかつたことも、敢えて筆を滑らすよう述べてきたことをお含み置きください。まだ書きたいことがあるが、拙著をお読みいただければ幸いであります。

身分の高い人物も、職人を大事にしたのが、モノ造り大国につながっているのだ。「荒廃」の章も設けたが、品質の改良のためにここまでやつたのが日本人なのだ。誰もが旅行に出かけられた治安の良さも日本の特色で、これからも大事にしたい。出版業を盛んにした好学で好奇心も豊富なのが、日本人の姿なのだ。

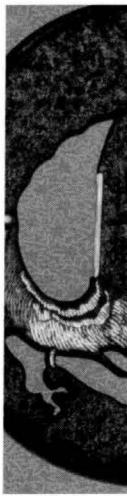
なお、拙著では廢刀令後の刀工の生きざまも、調べられる範囲で記述した。殉じた刀工は無念だと思う。一方で大工道具、彫刻刀、剪定鍊などの分野に転じて一流の評価を得た鍛冶もいる。忘れてはいけない。

(完)

拙著は、江戸時代の歴史を日本刀に関連す  
おりに

同封の振替用紙ご利用の上、刀剣柴田にご注文ください

**新刀、新々刀の歴史的背景**  
**江戸の日本刀** 伊藤三平著  
新刀、新々刀の歴史的背景  
江戸の日本刀 伊藤三平著  
A5判/ハードカバー/三七四頁  
税込定価 三、八八八円(送料三五〇円) 東洋書院



■ 東京国立博物館名譽館員・小笠原信夫氏推薦  
今までの刀剣専門書と異なり、とくに「新々刀」といわれる刀剣が幕末時代に隆盛した歴史性に絞って、画期的な視点から論述されている。新々刀とは、単に言葉だけの問題ではなく、寛文から元禄・享保までの刀剣とは明らかに異なる性格を持っている。

江戸時代における刀剣の位置づけ／江戸時代の武士にとっての刀剣使用／刀鍛冶は城下町に／剣術諸流派の勃興と停滞／辻斬り横行の時代／江戸時代の人口移動／江戸への刀鍛冶の流入／寛文新刀の出現／幕府・藩の財政状態と武士の困窮／元禄から享保の刀剣の衰退／享保以降の治安の悪化／水心子正秀と新々刀／花開く正秀の弟子たち／水心子正秀は江戸の産業ルネサンスを担つた／江戸の啓蒙主義／サロン文化／刀剣ジャーナリズムの拡大／正秀弟子の巨星・大慶直胤／天保の改革と剣術の流行／庶民への剣術の広がり／身上がり願望／切れ味重視の動き／荒試し／源清磨における切れ味追求／いつの時代にも大切な芸術の支援者／武器講／江戸時代の貨幣・収入単位と物価水準／新々刀の価格／刀が実戦に使われた時代／幕末の動乱／戊辰戦争と刀鍛冶／廢刀令／刀鍛冶の転身／帝室技芸員制度と日清戦争後の軍刀需要